

2025 年 11 月 2 日 召天者記念礼拝メッセージ「終わりから今を生きる」より
牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 7 章 14-23 節

「終わりから今を生きる」という言葉があります。この世に生を受けた全ての生き物は、いつか必ずその肉体の死を迎えます。ですから、そのような「終わり」があるということを意識して、そこから逆算して「今を生きる」ということです。その結果、「諸行無常。驕れる者も久しからず、盛者必衰の理」ということで、「死ぬことを忘れて、おごり高ぶるな」ですとか、「今なすべきことを、先延ばしすることなく、速やかになせ」とか、今を生きるための様々な教訓も導き出されてくるのだらうと思います。

中世ヨーロッパの修道院では、ラテン語で「メメント モリ(memento mori)」という言葉が、挨拶のように用いられたと、まことしやかに言われていますが、その意味は英語で言うところの「Memory the Death」、「死を覚えよ」「死を忘れるな」です。修道院という俗世とは離れた空間の中で、死を意識して今を生きる、本当に価値のあるもののために命と時間を使う、ということが大切にされたのでしょう。

そのことは、現代を生かされている私たちにとっても同じです。いくらお金や物をたくさん持っていて、あの世には持っていきませんし、裸で生まれ裸で還っていく存在です。ヘブライ語聖書の「ヨブ記」にも、「私は裸で母の胎を出た。／また裸でそこに帰ろう」(1:21)という言葉がある通り、そのような感覚は、人類が世界中で大昔からずっと抱いてきたものだったのだらうと思います。

そのようなことを考えた時、私たちは「今」をどのように生きていけばよいのでしょうか。ある人は「日々に一所懸命で、真剣勝負の覚悟をもって、大死一番。死ぬ気で頑張れば、何事も道は開けるということで、粉骨砕身すべし」と言う人もあると思います。ですが、そのような常に張り詰めた生き方は、息苦しいですし、「生き急ぐ」と言いますか、その張り詰めた糸がすぐにプツンと切れてしまいそうな危うさを秘めています。その一方で、では反対に何もせず、ただのんびんだらりと日々を過ごしていたら、それが有意義かと言うと、そういうものでもなさそうですし、日々に動いていないと、いざ動こうという時に、体を動かしたいと思っても、もはや体を動

かすことが出来なくなっている、動き方を忘れてしまっているということもありそうです。

もっとも、近年の日本社会の傾向としては、「団塊の世代」や「バブル世代」の「過労」「働き過ぎ」の反省として、「仕事とプライベートを分けましょう」「生活の中に『緊張』と『ゆとり』の緩急をつけましょう」と言われて久しくなって来ました。世代で言うと「ゆとり世代」や「Z 世代」でしょうか。ですが、一人の人が生きているという中で、「仕事とプライベート」など、それらが「明確に区別できる、色分けできる」としてしまうと、却ってどちらも色あせてしまうような気もしてなりません。

全ての人は「生まれた時から、死ぬことが決められている」わけですが、だからと言って、「どうせ死ぬのなら、生きる意味がない。生まれて来なかった方が楽だった」と言ってしまうと、出来ることも出来ない、得られるものも得られない。せっかくの命がもったいないことになってしまいます。逆に命に終わりが無かったらどうでしょうか。いつまで走り続けてもゴールがないマラソン、どこまでも登り続けても決して山頂に到着することのない登山。たとえ休み休みであっても、果たしてそれらを喜んで走ったり、やりがいを感じながら登ったりすることが出来るでしょうか。いつか終わりがある、ゴールがある、行き着く先があり、達成感を得られるだろう、得られるはずだというまだ見ぬものへの信頼があるからこそ、頑張ることが出来るのではないかと思います。だからこそ、私たちは日々、緊張しすぎることなく、休み過ぎることなく、快い程度の緊張感を持って、ゴールを目指して歩み続けること、が大切なのではないかと思います。

さて、そのようなことを言いつつ、私たちの終わりのある人生において、「大切な生き方」を知っているということと、それを実際に生きているということは、必ずしもイコールではありません。そのことは想像に難くないでしょうし、聖書にも記されていました。

今回の聖書のお話は、イエス様が人々に向かって、「外から人に入って、人を汚すことのできるものは何もなく、人から出て来るものが人を汚すのである」(マルコ 7:15)と話されたという所でした。ですが、この部分だけを読んでもよく分かりません。弟子たちに対して改めて解説された後半の「すべて外から人に入って来る

もの(すなわち、食べ物)は、人の心に入るのではなく、腹に入り、そして便所に出されていくので、人を汚すことができない」(18-19)や、続く「人から出て来るもの、つまり人の心から出て来る。^{いんこう}淫行、盗み、殺人、^{かんいん}姦淫、^{とんよく}貪欲、^{あざむ}悪意、欺き、放縱、^{ねた}妬み、^{ぼうとく}冒瀆、高慢、愚かさ、など、これらの悪はみな人の心の中から出て来て、人を汚すのである」(20-23)という言葉まで読んで、ようやく分かるのではないかと思います。この人の中に外から入って来る食べ物と、人の中から外へ出ていく悪意のたとえは、具体的でとても分かりやすく、如何にもイエス様らしい機知に富んだ「たとえ」だと思います。ですが、これだけだと「人間の中身は悪意だらけだ」で終わってしまいます。このお話は私たちに何を告げているのか、については、この今回の14節よりも前を見る必要があります。

「マルコによる福音書」7章の1節から13節までに書かれているのは、ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちとのイエス様の問答でした。当時のユダヤ教では、宗教的に清い・清浄か、清くない・不浄で^{けが}穢れているか、ということが、重視されていました。そのために「³ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを守り、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず、⁴また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、水差し、銅の器や寝台を洗うことなど、守るべきこととして受け継いでいることがたくさんあり」ました。その一方で、イエス様の周りには「汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者がい」(2)ましたから、それを見た「ファリサイ派の人々と律法学者たちが『なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか』と尋ねた」(5)のでした。

確かに、現代の私たちの感覚からすると、外から家に帰ったら、手洗いうがいが必要。トイレの後も石鹸で手を洗うのが好ましいと言われます。それは付着した細菌を洗い落とすためであり、感染を予防するためです。もちろん、2000年前にはそのような科学的な知見はありませんが、昔の人の言い伝え、先人の知恵として、継承されていたのかと読んでしまいそうになります。しかし、ここでイエス様が言っているのは、そのようなことではありません。

「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食

事をするのですか」(5)と尋ねたファリサイ派の人々と律法学者たちに対して、イエス様は「あなたがたは、自分の言い伝えを重んじて、よくも神の戒めをないがしろにしたものだ」(9)と言い、市場から帰ったら手だけではなく、水に身を沈めたり、杯、水差し、銅の器や寝台を洗う(浸し洗い)ことなどをしてからではないと食事をしてはいけない(4)、という過剰とも言える演出、パフォーマンスが「先人から伝えられている決まり」として伝承され、実践されていることを批判されました。

そしてその基準に従って、それらを守ることができない人々、貧しい庶民たちを穢れた存在と見なし、差別し、断罪していた彼ら宗教指導者たちを批判して、「人を穢すのは、物理的に汚れた手や食べ物ではなく、他人を見下すふるまいだ」という意味で、「人の中に外から入って来る食べ物は全て清く、人の中から外へ出ていく悪意が人を穢す」と厳しく言われたのでした。

さて、このイエス様の言葉は、私たちにはどのように響くでしょうか。「終わりに今を生きる」を意識する時、私たちは誰と共に、どのように生きることを選ぶでしょうか。「自分は清く正しく、神様に認められ、喜ばれる生き方をしているが、他の人たちはそうではない」とおごり高ぶることがないようでありたいと思います。

今日は召天者記念礼拝として、多くの方々のお写真を並べて礼拝をしています。「この人はあんなだった」と思い出されることも多々あると思いますし、良いことばかりではない思い出もあるかもしれません。それでも確かにこの地上で神様から命を頂いて、その恵みの内に生を全うされたということ、そこには偽りはありません。その方々と共に出会わされ、生かされた恵みを思い返ししながら、私たちは今日もここから、目指すべき「終わり」を覚えて、神様と共にあって歩みを進めて参ります。